

株式会社ニデック

New WorkFriend-FXの使いやすさが他部門にも波及。iSeriesの柔軟性との相乗効果で情報武装を支える。

眼科向けの手術装置を出発点に、眼鏡店向け検査装置などを手がけるニデックは、各種光学部品のコーティングを行う東浜工場の生産管理システムとしてiSeriesを導入。同時にデータ活用ツールとしてWorkFriendシリーズを導入した。New WorkFriend-FXの使いやすさとそれを支えるiSeriesの柔軟性は、他部門にも波及。現在では他社製汎用機上の基幹システムのデータや、他社製オフコンのデータもiSeriesに転送し、WorkFriendで活用している。同社情報システム部の植村部長と花井課長に聞いた。

企業DATA

設立	1971年7月
代表取締役	小澤 秀雄
資本金	4億6,189万円(非上場)
従業員	1,242名
URL	http://www.nidek.co.jp/

使いやすさが導入の決め手

ニデックは1971年の設立当初から一貫して、眼に関わる事業を推進している。いまや世界のブランドとして知られる眼科用各種医療機器を皮切りに、さまざまな光学部品やメガネレンズのコーティング事業、眼鏡店向け測定機器等へ事業領域を拡大し、2001年には人工視覚研究所を設立。ここでの研究は、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)から「人工視覚システムの研究開発」プロジェクトの委託先として選ばれている。

特にコーティング事業は、メガネレンズ、液晶パネルといった人々の生活に身近なものから、レーザー部品、光通信などのキーパーツまで広範囲に事業が拡大。それとともに生産拠点も増え、メガネレンズのコーティング向けに鶴ヶ浜工場が稼働、各種光学部品へのコーティング向けに東浜工場、大沢工場が稼働している。ニデックではもともと基幹システムに他社製の汎用機を使用し、メガネレンズのコーティングでも同じ会社のオフコンを使用していたが、東浜工

場の生産管理用にはiSeriesを導入。同時に、社員がデータを自由に活用するためのツールとしてWorkFriendを導入した。

「東浜工場では加工工程に払い出すロットが大きいことから連続帳票の使用を止め、コピー用紙で伝票を発行しています。基本的なパフォーマンスはもちろん、印刷環境の柔軟性が高いことからiSeriesを選択しました。データ分析ツールも、他社ハードウェアで動くものに比べ、WorkFriendに格段の使いやすさがありました」(同社情報システム部・花井課長)

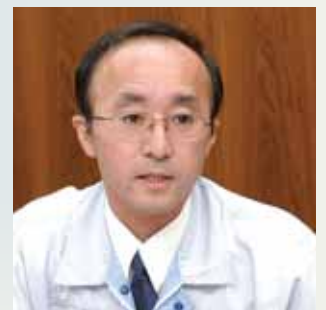
使いやすさにはさまざまな要素があるが、「とりあえずデータを見たい時などには全ての項目を一括で設定することが可能で、かつ条件を設定する際にもそのやり方がかわめてわかりやすい」ことが現場からも好評だったとのこと。導入時には講習会も開催したもの、実際に使い始めると講習会の必要性もないほどにスムーズに現場での活用が進められた。

WorkFriendは「New WorkFriend」へ、そして「New WorkFriend FX」へと進

化を遂げ、大幅な機能強化、速度アップが図られているが、年間100万件を超える売上データが発生する同社では「速度面のさらなる向上」が課題。そもそもWorkFriendシリーズは、最大6万件強のデータ処理を行うOpenをベースとするだけに、数年分、つまり数百万件のデータを処理する際には限界もある。そこでニデックでは、あらかじめ情報システム部側で現場ユーザーの利用が想定される複数のサマリーデータを作成するなど、ツールの限界をカバーし、長所を生かす運用が行われている。

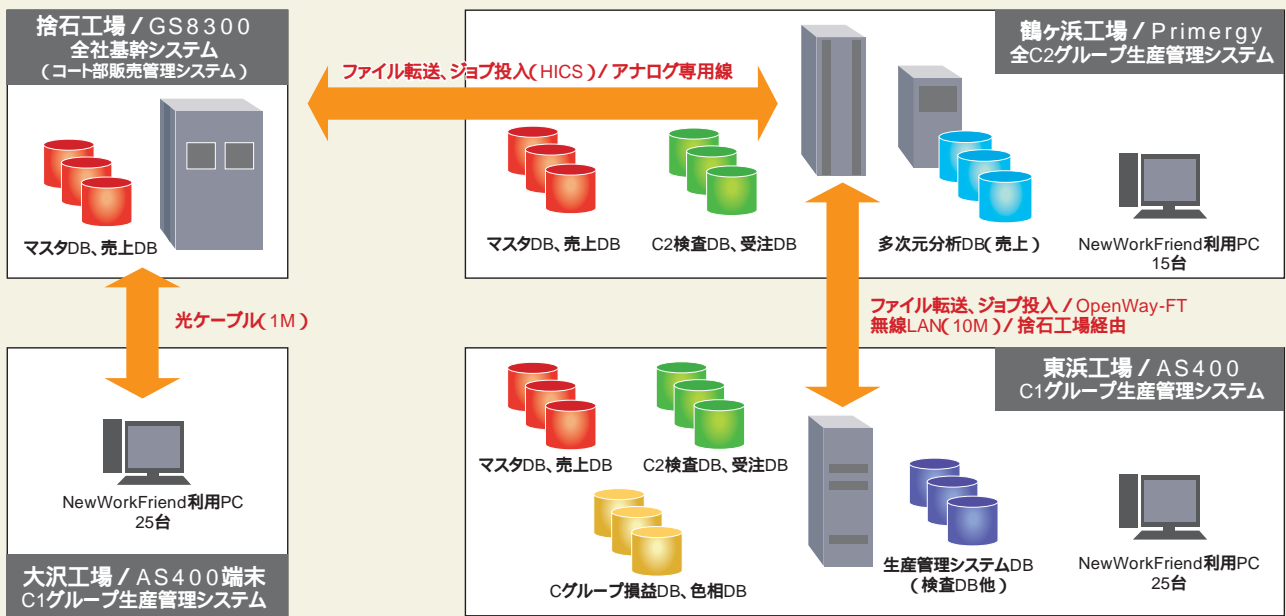
他社ハードからデータを転送 WorkFriendで分析

もともと東浜工場(各種光学部品向けのコーティング)の生産管理システムとして導入したiSeriesとWorkFriendだ



株式会社ニデック
情報システム部 植村部長

NewWorkFriendシステム構成図



株式会社ニデック
情報システム部 花井 課長

つたが、WorkFriendの使い勝手の良さが知られるにつれ、その活用範囲が広がっている。具体的には、他社製汎用機で動いている基幹システムのデータ、さらには同じく他社製オフコンで動いているメガネレンズ・コーティングの各種データをWorkFriendを使って分析したいという要望が現場から生まれてきたのだ。

オフコンからiSeriesへのファイル転送は、あるソフトウェアを利用することで実現した(図の緑のデータ)。問題は汎用機だった。汎用機からiSeriesへファイルを送るソフトウェアも存在したが非常に高価なものだった。そこで、汎用機とオフコンは同一メーカー製でファイル転送の仕組みを持っていったことから、基幹システムのデータを汎用機から一度オフコンに転送し、さらにiS

eriesに転送する仕組みを構築した(図の赤のデータ)。

2003年の下期にはこのオフコン(メガネレンズ・コーティング)がリリースされ、再び既存メーカーのハードウェアが導入された。さらにこの時、営業やマーケティング用に多次元分析ツールの導入が検討され、ニデックでは当該メーカーの推奨商品とWorkFriendシリーズを比較検討。最終的に、WorkFriend-EXの多次元分析オプションが導入された。

多次元分析用のデータベースはPCサーバーに置かれるため、オフコンのデータは一度、iSeriesに転送された後、再びPCサーバーに転送されるカタチとなっている(図の水色のデータ)。

こうしてWorkFriendの活用範囲が広がっていった結果、現在ニデックでは、合計65台の端末でNew WorkFriend-EXが活用されている。各現場では日報や月報が定期的に「紙で」出力されることはもはやなく、ユーザー各自が必要とする情報はすべて、New WorkFriend-EXを利用してEXCELフォーマットで入手するエンドユーザー・コンピ

ューティングを実現している。

ところで、多次元分析用にPCサーバーを導入したニデックでは、今後、工場の生産管理システム、さらには現在汎用機で運用している基幹システムなどをPCサーバーに移行する考えを持っているのだろうか。

「PCサーバーは導入時のインシャルコストは低いものの、安全性・信頼性を考慮するとリスクが高い。加えて故障率や故障時の対応などの運用コストを考慮すると、必ずしもコストパフォーマンスが高いとは言えません。今後も適材適所で使い分けていくことになります」(同社情報システム部・植村部長)

つまり、万一、停止しても全社的なダメージにはならない分野のみPCサーバーを利用する「姿勢を徹底している」。

信頼性や安全性を重視する姿勢は、眼の安全にこだわってきた同社の生業とも深く絡んでいる。「他社より優秀な商品を常に先行して提供する」開発力を武器に挑戦を続けるニデックにとって、New WorkFriend-EXを中核とした情報力は大きな戦力となっている。